

Nara Women's University

昆布ロードのなぞを追うー『鎖国』から『アヘン戦争』へー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学附属中等教育学校 公開日: 2011-04-04 キーワード (Ja): 公開授業, 昆布流通, 歴史 キーワード (En): 作成者: 松尾,直子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2665

昆布ロードのなぞを追う

— 『鎖国』 からアヘン戦争へ —

松尾 直子

I はじめに

1 はじめての公開授業

本授業は、2009年2月21日に本校で開催された公開研究会での公開授業として行った。産休・育休代替の常勤講師として2008年7月末から勤務を始めた私にとって、悪戦苦闘しながら多くの事を学んだ、はじめての公開授業となった。

授業づくりは、本校社会科の北尾悟と共同で行い、京都橘大学の井ノ口貴史教授を指導助言者として行った。公開当日までに4回の授業検討会を実施し、奈良県歴史教育者協議会の例会でも中間報告を行って先生方からアドバイスをいただいた。

2 授業の問題意識

中学2年生の歴史学習では、日本史の流れを学ぶとともに、東アジア世界との関わりの中で日本社会がどのように形成されてきたかを知ることがねらいのひとつとなる。特に、中国の諸王朝と周辺諸国との朝貢冊封体制に基づいた東アジア世界のあり方を、人・物の移動や外交・文化の諸相を通じて具体的に理解しておくことは、その後19世紀に欧米諸国がアジアに進出し、諸国間の外交関係が条約体制に移行していく、その変化を理解する上でも重要だろう。しかし、中学歴史の教科書を開いてみると、江戸時代に入って「鎖国」が成立して以降、中国は限られた貿易相手国のひとつとして述べられるにとどまり、更に清という王朝名は19世紀アヘン戦争の際になってようやく、イギリスに敗れる対象として登場してくるのである。

そこで本授業では、中学2年生が江戸時代の国際関係史を学ぶ上で、「鎖国」以後の日本社会とアヘン戦争以前のアジア世界をどうつなぐかを考え、江戸時代の「昆布ロード」を追及することにより、日本社会と東アジア世界との関わりの実態をとらえ、「鎖国」政策による日本社会の閉鎖的なイメージを問い直すことをねらいとしている。

II 教材の研究

1 昆布ロードとは？

江戸時代の昆布流通は、主に富山の廻船問屋が担った。彼らは、北海道松前から北前船で昆布を敦賀や小浜、下関を経て大阪へ運んだ。京都へは、敦賀から陸路で琵琶湖へ、船で坂本から陸揚げして再び馬で運ばれた。その途上、富山の“とろろ昆布おにぎり”や若狭の“鯖寿司”など、現在につながる郷土料理を生み、大阪まで運ばれた昆布はここで食べ尽くされて江戸には届かなかったとまでいわれる。

更に、富山商人は長崎から中国へ昆布を輸出し、その代わりに薬種を輸入した。中国では、内陸の

ヨード不足を原因とする甲状腺の病気に効く薬膳として、昆布が重宝された。一方、“越中富山の薬売り”は、この昆布輸出で得た薬種をもとに、8代将軍吉宗のころまでには全国へ展開していったといわれている。

しかし、19世紀中頃、薩摩藩の介入で新たな昆布ロードが誕生する。薩摩藩で、家老調所広郷による藩政改革が行われていたころである。薩摩藩は、富山の廻船問屋能登屋が組織する「薩摩組」に昆布を琉球に搬送するよう求め、その代わりに薩摩藩の領内で薬を売することを認めた。こうして、長崎港へは入らずに薩摩藩を経由して琉球に至る、新たな昆布の国内流通ルートが確立した。

薩摩藩は、こうして琉球に搬送された昆布を、琉球の進貢船で中国へ輸出し、その利益で藩の財政を立て直したといわれる。那覇港の中心地には、「昆布座」とよばれる役所が設けられ、昆布取引の拠点とされた。琉球から清朝に向かう進貢船の積荷は昆布が70～90%を占め、1隻で約10トン、年間90～100トンの昆布が輸出された。また薩摩藩は、この琉球ルートによってアヘン戦争などの東アジア情勢に関する情報を得ていたのである。

2 授業のねらい

「昆布ロード」は魅力的な教材で、調べれば調べるほど幕府の経済・外交政策や薩摩藩の思惑、松前や長崎での取引に携わる商人達の動向など、興味深い史実が分かった。それ故に、授業の展開をどのように終着させるか悩んだ。当初の展開としては、授業のまとめとして「昆布の密貿易によって利益をあげていた薩摩藩を幕府はどう見ていたか」など、「鎖国」政策や藩政改革に関する問いかけを行い、議論することを計画していた。

しかし、本校の勝山元照から、外交や政治の問題についてよりも「江戸時代は決して閉鎖的な社会ではなく、限られた流通の中でも豊かな食生活が育まれた」ということを伝えるほうが重要ではないか、とのアドバイスを受けた。そこで本授業では、富山の“とろろ昆布おにぎり”と沖縄の“クーブイリチー（昆布と豚肉の炒め物）”を持参し、東アジア世界にまで広がるダイナミックな昆布流通のあり方、その土地その土地で育まれていく食生活の多様性や豊かさを生徒が実感することをねらいとした。このような実感を通して、生徒自身が江戸時代の日本社会を具体的に理解し、「鎖国」政策による閉鎖的なイメージを問い直すことができればと考えた。

3 授業の位置付け

薩摩藩による藩政改革の一環として、開国やアヘン戦争を学習する前段階として位置付けられる。しかし、今回は進度の状況をふまえ、以下のような単元構成で行い、「鎖国」以後の国際関係の変化を理解することに重点をおいた。

- 第1時 消えゆく日本町 ―鎖国成立への経緯を知る―
- 第2時 捕物頭弾左衛門のしごと ―身分制や民衆支配の様子を知る―
- 第3時 米は天下の回りもの ―米作りと米の流通の様子を知る―
- 第4時 三井越後屋の商い ―貨幣経済の発達について知る―
- 第5時 昆布ロードのなぞを追う【本時】

Ⅲ 授業のながれ

授業クラスは、2年A組40名、うち公開研究会当日には38名が出席した。また、同様の教案で2年B・C組でも授業を実施した。

【導入】

■日本全国の白地図を配布する。

■昆布について知ろう！

T 利尻昆布と日高昆布を持参し、示しながら昆布の食べ方やワカメとの違いを確認する。

「では、昆布がどこでとれるか、分かりますか」と問う。

S 「北海道」。

T 「そうです。北海道。みんな知っていましたか」。北海道産であることを確認する。暖かい地域でとれると思っていた生徒もいた。

「それでは、現在、日本の中で一番昆布が食べられている地域はどこでしょうね」と問いかける。

ここで、次の資料1「都道府県別 1世帯当たり年間の昆布購入数量」を黒板に掲示し、表のタイトルと内容を簡単に説明する。地域A・地域Bは隠してふせている。

資料1 都道府県庁所在地別 1世帯当たり年間の昆布購入数量

*総務省統計局『家計調査年報』(2008・1996・94・92・90・88年度)より作成

	2008年		1996年	1994年	1992年	1990年	1988年
1位	A 10 12g	…	盛岡市 13 61g	A 114 7g	A 10 12g	A 10 80g	B 11 03g
2位	青森市 9 81g	…	A 9 11g	B 101 9g	B 9 76g	B 9 84g	A 10 87g
3位	山形市 7 20g	…	青森市 8 80g	山形市 8 90g	盛岡市 8 46g	盛岡市 9 35g	青森市 9 18g
4位	盛岡市 6 98g	…	山形市 8 08g	盛岡市 8 68g	山形市 8 04g	青森市 8 41g	山形市 8 69g
5位	宇都宮市 6 54g	…	B 7 85g	青森市 7 30g	福島市 7 66g	高知市 8 37g	盛岡市 8 64g
	↓						
12位	B 5 45g						

T 「では、資料1の中の、2008年昆布消費量1位の地域Aはどこでしょう」と問う。

S 「北海道」。

T 「なんで？」

S 「北海道でとれるから」。

S 「奈良」「大阪」「やっぱり北の方やと思う」「四国とか」。

T「答えはね、富山市です」と言いながら、ふせていた資料1の地域Aを開く。生徒は意外な様子で、「遠いなあ」「地味や」などとつぶやいている。

T「2008年に1位の富山市では、年間に1kg以上も昆布を食べている！奈良市は9位で554g。大阪市は27位で453g。京都市は20位で482g」
ここで、持参した“とろろ昆布おにぎり”をみせる。

S「何？」「それ食べれんの？」

T「富山の人達は、出汁をとるだけでなく、昆布そのものを沢山食べている。これは、海苔の代わりにとろろ昆布をおにぎりに巻いた“とろろ昆布おにぎり”。富山の人達は、遠足に行くときは必ずとろろ昆布おにぎりを持って行く。コンビニでも売っている。」

「ではね、北海道でとられた昆布がなぜ富山でたくさん消費されるようになったのかな？」と問う。

S「富山の人が昆布好きだから。」

T「なんでそんなに好きになったんやろ？他の人はどう思う？」

S「船で運びやすいから」「北海道から運ぶときに日本海を通過して富山に運びやすかったから。」

T「なるほど。実は、江戸時代から富山で昆布ブームが始まった。江戸時代に北海道産の昆布がたくさん富山に運ばれて食べられるようになった。今日は、その理由を考えます。」

【展開1：最初の昆布ロード】

■黒板に日本全体の地図を掲示し、昆布ロードを記入していく。

T「江戸時代に北海道の昆布がどうやって富山まで来たのでしょうか？選択肢は2つ(板書する)。

ア、北海道の人が富山へ売りにきた イ、富山の人が北海道へ買いに行った。
どちらかに手を挙げてください。」

S アを選択した人が、7人。イは、31人。

T「答えはイです。富山の商人は北前船と呼ばれる船で北海道まで買いに行った。北海道には松前藩という藩がありました(地図に記入)。その後、船は東へ行きますか、西に行きますか？」

S「西」。

T「もちろん西に行きますね。富山に近い。それに、太平洋では西風が強くて西に流されてしまい、危険。江戸時代には東へ行く航路は流行らなかった。では、西へ行く航路は何と呼ばれましたか？」

S「西廻り航路」。

T「そうです。では、配った白地図に西廻り航路を描いていきましょう。昆布ロードです。北海道の松前から山形の酒田に寄港したりして、南へ進み、富山まで来ました(地図に記入)。

でも、昆布は富山で全部なくならない。その後、富山の商人は昆布をどこへ売ったのでしょうか？」

S「都会」「たくさん売れる所」「江戸」。

T「江戸までどうやって持っていく？」

S「歩いて」。

T「歩いて持って行くには飛騨山脈を越えなければならない。大変です。他には？」

S「大阪に持って行く」「富山の近くに売る」。

T「では、地図で昆布ロードをたどってみよう。富山を出て、敦賀や小浜へ。京都へはここから陸路で琵琶湖へ、船で坂本から陸揚げし、馬で京都へ。下関を経て大阪へ。ここまでで食べ尽くされて江戸には届かなかったとする説がある。今でも関東では鰹だし、関西では昆布と鰹のだしですね」

「更に、下関からは九州へ入り、長崎まで持ってきた。さて、長崎からはどこへ売る？」

S「もっと南の熊本」「四国へ」「朝鮮半島へ」。

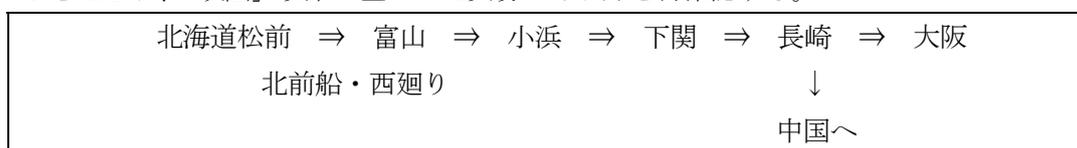
T 「実はたくさんの昆布が長崎から中国(清)へ輸出された。富山の商人は、松前から昆布を運んできて、長崎で中国人の商人と取引して輸出した。中国では、(ヨード不足による甲状腺の病気に効く)薬膳として、昆布が重宝された。」

「そして、昆布を中国に輸出して、中国に昆布を売って中国からは得たものは、以前勉強したこれです(クローブ・シナモンを提示)。何か覚えているかな？」生徒は、既に「ムスリム商人による海のネットワーク」で東南アジアの4大スパイスを学習。その際にクローブを食べてみた生徒は顔をしかめてうなずいている。

S 「スパイス」「クローブや」「東南アジアでとれる」。

T 「そう、前に勉強した時は、東南アジアからヨーロッパへ運ばれていった。肉の腐敗防止の為。大変高価な物として、銀と同じ価値で取引された。」

「今回は、中国から日本に薬の原料として運ばれてきた。富山の人はこれを薬にして全国へ売った。富山の薬売りです(“置き薬”について説明)。富山の薬売りは吉宗の頃には全国へ展開していた。」ここで、あらためて地図で最初の昆布ロードを確認する。ここでは、下図のように長崎を経由するルートをたどり、「鎖国」政策に基づいた交易のあり方を再確認する。



【展開2：昆布ロード2】

■昆布ロードは変化する！

T 「これで資料1の表で富山が一位である理由は分かった。でも、地域Bが残っています。地域Bは、2008年は12位。だけど12年前は5位。14年前は2位。20年前は1位で富山と上位を争っていた。さて、地域Bはどこでしょう？」と問う。

S 「北海道」。北の方だと考えた生徒が多かった。

T ここで資料2『首里那覇港図屏風』を配付する。屏風の名称はふせている。

T 「この絵は、江戸時代の地域Bを描いたものです。じっくり見て、地域Bがどこか考えてみてください。」

S 「長崎。外国の船っぼいのがある。」

S 「全部日本の船じゃない気がする」「やっぱり長崎」。

S 「沖縄。右上に慶良間島って書いてある。」

T 「地域Bの答えは、沖縄の那覇市です(ふせていた地域Bを開く)。実は、江戸時代の終わりごろに、沖縄まで運ばれる別の昆布ロードが生まれた。では、なぜ沖縄に運ばれるようになったのでしょうか？選択肢は2つ(板書する)。

ア、富山の人が沖縄へ売りにきた イ、沖縄の人が富山へ買いに行った
どちらかに手を挙げてください。」

S アを選択した人が、11人。イは、26人。

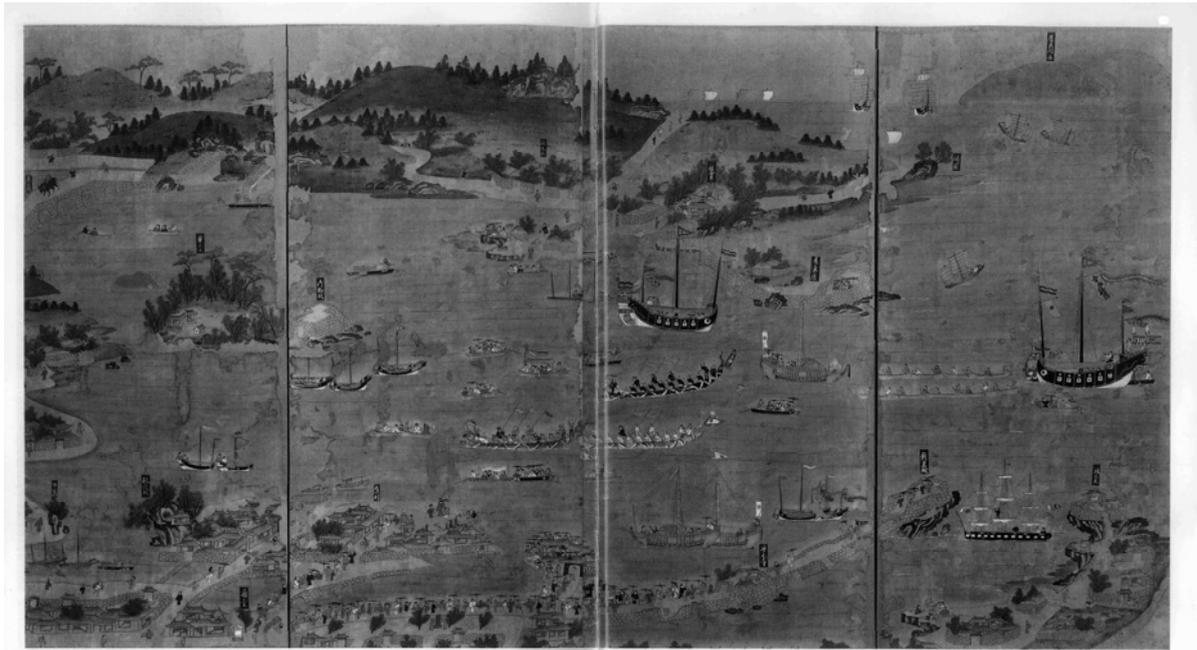
「アだと思う。沖縄まで昆布の情報が伝わっていなかったから富山の人が持っていった。」

「イ。富山でも売れているから、わざわざ沖縄に売りに行かなくてもいい。」

「イ。ものすごく売っていたから情報が伝わって沖縄の人が買いにきたんじゃないか。」

T 「なるほど。答えは、アです。富山の人が売りに来た。江戸時代の沖縄には、何という国がありましたか？」

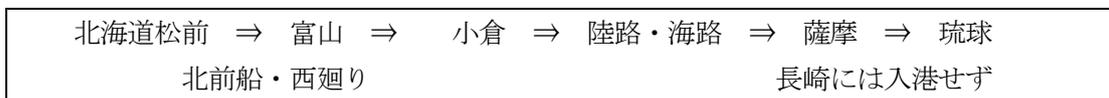
資料2 『首里那覇港図屏風』(沖縄県立博物館・美術館所蔵)



S 「琉球王国」。

T 「そうです。江戸時代の沖縄は琉球王国。だが、江戸時代の初期から薩摩藩の支配を受けていた。富山の人が昆布を沖縄へ売りに行ったのは薩摩藩がきっかけです。江戸時代の終わりごろ、薩摩藩は、富山の商人能登屋に、薩摩藩の領内で薬を売ること認める代わりに、昆布を琉球に売りに行くように求めた。それで富山の商人が、北海道から薩摩を通して沖縄まで昆布を運ぶようになったのです。」

ここで、下図のように新しい昆布ロードを地図に記入する。



T ここで、沖縄の郷土料理“クーブイリチー”を持参する。

「沖縄では昆布を出汁として使うだけでなく、刻んで炒め物にして食べる。これは、沖縄の昆布料理で、“クーブイリチー”という料理。豚肉と昆布の炒め、醤油と酒と砂糖で味付けしている。こうして、沖縄でよく食べられている豚肉と北海道からやってきた昆布が会って、現在では沖縄の家庭料理となっているのです。」

【まとめ】

■更に続く昆布ロード！

T 「琉球が昆布ロードの終点か？ 実は、そうではない。いったいどこへ続くと思う？」と問う。

S 「四国」「東南アジアとか台湾」。

T 「なるほど。琉球は東南アジアの国々ともさかんに交易しているので、昆布が東南アジアや台湾に行ったかもしれません。たくさんの昆布が、やっぱり中国へ輸出されている。もう一度、資料2の那覇港の図を見て下さい。資料2の図の中に中国へ行く船がある。どれか分かる？」

S ほとんどが大型の進貢船を指摘する。

T 「そうです。この大きな黒い琉球船が那覇港から中国へ行く船。1隻で昆布を約10トン載せ、年間90～100トン輸出された。この琉球船は目玉が描かれ、百足旗が掲げられている。大型のジャンク船。資料2には、他に薩摩の御用船や琉球-薩摩間の定期航路や東南アジアへの航路で使われたジ

ヤンク船、更にフランス船が描かれている。薩摩藩は琉球の那覇港に「昆布座」(役所)を設置、昆布を輸出して利益を得た。また昆布を輸出する一方で、中国からはやはり薬の原料を輸入した。」ここであらためて新しい昆布ロードを確認し、更に下図のように琉球から中国への道を書き加える。

北海道松前	⇒	富山	⇒	小倉	⇒	陸路・海路	⇒	薩摩	⇒	琉球	⇒	中国へ
		北前船・西廻り								琉球の船(進貢船)		

T「こうして昆布は北海道から沖縄へ、さらに中国まで行った。逆に中国から沖縄にやって来た食材もある。何か知っていますか？」

S「サツマイモ」と、つぶやく。

T「答えは、サツマイモ。ゴーヤーもそうです。サツマイモは鹿児島では『琉球イモ』。沖縄では『唐イモ』という。江戸時代に中国から琉球を経て薩摩へ、そして全国へ広がった。江戸時代は『鎖国』と学んだけど、こんな風に昆布が中国へ伝わったり、逆にサツマイモなどの食材が伝わって来たりした。」

最後に、地図で2つの昆布ロードを確認して授業を終える。

IV 公開授業後の感想・授業参観者の批評から

1 生徒の感想(抜粋)

- ・富山の薬の事と昆布ロードの話がつながっているのはとても興味深いと思った。たくさんの人に見られながらなので緊張したけど、普通にできたのでよかった。
- ・とれるところは北海道なのに、消費は富山が一番多いことが印象的だった。
- ・さつまいもの名前の伝わりかたがおもしろかった。
- ・昆布が日本中に広がっていくことが心に残った。
- ・日本全国につながっているのがすごいと思った。
- ・昆布がとれた場所から離れた場所で食べられていることが印象に残った。昔は北海道でとれた物はほとんど北海道で食べられているというように、交易は少ないと思っていた。
- ・この時代に松前でとれた昆布が琉球まで伝わっていったことが一番印象に残った。
- ・陸をいかず海のめんどくさい航路を通るなあと思った。北海道の昆布が中国や沖縄までいくのがすごい。
- ・先生がめっちゃ緊張しているのが分かって、いつもよりはきってはったので、こっちもがんばれました。作ってきたとろろ昆布のおにぎりとかクレープイリチー食べるんかなって思ったのに食べられなくて残念でした。
- ・先生が昆布の料理を作ってきて、それがおいしそうだったことが印象に残った。
- ・先生の気合いにびっくりした(表とか料理とか・・・)。見に来る人の多さにもビックリした。
- ・内容はとてもおもしろかった。ただ、挙手するクイズが少しグダグダに・・・(笑)
- ・先生が緊張気味でした。話し方も堅く、面白みが少なかった。
- ・昆布を回してほしかった。
- ・せっかく料理を作ったなら食べさせてほしかった。

2 授業参観者のピアレビュー・批評

- ・実物教材、昆布、昆布おにぎりなどを用意して生徒の関心をひかせる努力が伺えた。
- ・一限目と違い、若い教員らしい授業であった。実物教材や手作りの料理など準備をしていたのが良かったと思う。ベテランの教員と違ったアプローチの仕方があった。ただ、生徒が緊張していたせ

いかあまり活発な反応をしていなかったの、そこにうまく切り込むことができなかつたようである。生徒に活発に論議ができるようになれば、それはやはりベテランの技になるであろうか。

- ・同封しましたが、昆布ロードについて、このような文献（清水義範著・西原理恵子画『どうころんでも社会科』（講談社文庫）、講談社、2003年）をご紹介いただいた—授業者註）があります。ただしこれも先生が参考文献に挙げられた大石氏の研究がもとですので、どのように教材として扱ってもいいのですが、私は清水氏のように「なぜ昆布が沖縄に？」というテーマで十分ではないかと思ひます。そうしますと調所広郷が出て薩摩藩の藩政改革から幕末への展望が見えますし、長崎以外の海外貿易ということが具体的に理解でき、「鎖国からアヘン戦争へ」というテーマにより合致したのではないのでしょうか。清水氏の本にもありますように、富山もいいのですが、メインは琉球で構成された方がよかつたのではないのでしょうか（ただし、北前船をメインとすると、富山のほうがいいのですが）。…中略…それと、進貢船について、ある生徒が慶良間島と言つた時に、なぜそのあとあえてほかの生徒に聞いたのかという疑問を感じました。私もどのようにすれば良かつたのかはわからないのですが、生徒がせつかく答えたことが報われないように感じたのですが、いかがでしょうか。

V 今後の課題

本授業では、展開1で「なぜ富山へ?」、展開2で「なぜ沖縄へ?」という2本のテーマを設定したが、授業参観者から長崎以外の交易ルートを学ぶには後者で充分ではないか、との指摘があつた。確かに、目的地を2つ設定したことで、くたたく感じた生徒もいたようだ。授業後、奈良県歴史教育者協議会の例会で報告した際、富山商人の“狂言回し”としての役割をポイントにして展開すれば新旧昆布ロードの変化をもつとつかみやすくできたのではないか、また最後は他の食材についてはなく、中国から得た薬種の種類や量を明確に示して昆布ロードの裏に薬種の動きがあることを確認すべきだつたのでは、との指摘をうけた。

資料2『首里那覇港図屏風』の活用についても、課題が残つた。授業では、資料2を提示し、巨大なジャンク船やペーロン競争、薩摩藩の御用船に注目させて那覇の港であることを確認することをねらいとした。しかし、授業参観者から中学2年生になるほどと納得できる決め手にはならないだろう、との指摘があつた。確かに、公開授業では「長崎」と考えた生徒が多く、うまく展開することができなかつた。『首里那覇港図屏風』は情報量も多く、見ていて楽しい教材なので、今後その活用法も含めて授業の展開を再検討する必要がある。

また、本授業については、2009年8月に北海道で開催された歴史教育者協議会の大会で実践報告する機会を得た。その折にも、たくさんのアドバイスや指摘をいただいた。特に、昆布の生産に関する取り上げ方が不十分ではないか、との指摘をうけた。確かに授業では、昆布を生産して松前藩に納めてきたアイヌの人々について、十分にふれることができなかつた。また、産地である「北海道」という地名についても、「蝦夷地」や「アイヌモシリ」など、時代背景を考慮したものにするべきであつた。

また今回の授業は、謎解き風に展開する方法で実施した。これに関して、発問を二択にする場合、教員は一方が正解であることを知っているのにもう一方を選択する理由をながながと聞く必要はあるのか、生徒は答えを聞いた後「なあんだ。分かつてるなら早く言えよ」という気分にならないか、との指摘をうけた。これについては、私自身が経験も浅く、生徒の興味や関心をひきつけながら、テンポ良く謎解きを展開できなかつたことにも大きな原因がある。しかし、江戸時代の人びとは、様々な選択肢がある中で、社会の情勢や可能な方法を考慮し、義理を立て、損得勘定しながら、ひとつの道

を選んできた。このことを生徒自身が同様に体験することが、当時の人々の力強い生き方やダイナミックな流通を実感することにつながるのではないかと考える。

私の授業そのものは全く予定通りにいかなかったが、それでも生徒は一生懸命考えながら取り組んでくれた。生徒の感想を読むと、昆布ロードのダイナミックな動きや食生活の豊かさを実感してくれたようである。年度が終ってからも、「昆布料理食べさせてや」と言ってくれる。今回、昆布ロードの授業づくりをされていて、我々のごくごく日常的な生活がどれだけ過去の社会のあり方と深くつながって育まれてきたものであるかを強く感じた。今後も、このような実感を大切にしながら授業づくりをしていきたいと思った。

VI おわりに

公開授業から約10ヶ月経った2010年1月、沖縄へ旅行した。授業で使用した『首里那覇港図屏風』を手にも、少しでも当時の面影が残っているかと思いつながりながら那覇市内を歩いた。しかし、戦後の米軍占領下の区画整理と港湾の埋め立てにより、昆布座のあった那覇市西町のあたりは倉庫とホテルが立ち並び、もはや昆布座などの場所を特定することはできなくなっていた。それでも最近では、清朝から遣わされた冊封使が港から滞在先の天使館や首里城まで歩いたルートをたどる、ウォーキングイベントなどが開催されているようである。

「昆布ロード」は、北海道や富山、そして沖縄、更に中国など地域の歴史をふまえ、まだまだ改良すべきところのある興味深い教材である。最初にこのダイナミックな流通ルートを知った時の感動を忘れずに、今後も生徒とともに「昆布ロードのなぞを追う」授業をつくっていききたいと思う。

また、この度、講師の立場にありながら公開授業や実践報告などの貴重な体験をすることができた。このような機会を与えてくださった奈良女子大学附属中等教育学校に深く感謝の意を表したい。本授業は、自分がこれまでやってきた授業スタイルとは全く異なるもので、展開の仕方や発問に最後まで悩まされた。しかし、慣れない展開の方法に挑戦したことで、それまでとは違う教材の扱い方や発問の仕方を学ぶことができた。共同で授業づくりを行った北尾悟氏はじめ、私とは世代も異なり、経験も豊富な先生方から指導を受けたことは、自分の狭い視野で続けてきた授業を客観的に見直し、多様な授業のあり方を知る大変得難い機会となった。公開授業を終えてから、自分の授業づくりに対する考え方や、具体的な展開の仕方や発問が随分変わってきたように思う。このような経験ができたことは、これから先、教員を続けていく上で大きな財産となるものだと、今改めて感じている。

<参考文献>

- ・大石圭一『昆布の道』第一書房、1987年。
- ・地方史研究協議会『情報と物流の日本史—地域間交流の視点から—』雄山閣出版、1998年。
- ・徳永和喜著『薩摩藩対外交渉史の研究』九州大学出版会、2005年。
- ・フジッコ株式会社監修『フジッコ食育まんが劇場 こんぶロードの旅』エンタイトル出版、2007年。
- ・網野善彦編『琉球弧の世界』〈海と列島文化第6集〉、小学館、1992年。
- ・テレビドキュメンタリー『謎の昆布ロード—幕末の北海道・中国ルートを追う』(BSジャパン、2003年10月22日放送)